

冥加みょうがの力

鳴海・瑞泉寺

近藤高峰老師(中49)を訪ねて

東海道五十三次鳴海の宿、広重の画によるとごくごく普通の宿場町。豊橋から名鉄線に乗り換え、車窓に眼を馳せること四十分、鳴海の駅に着く。扇川の橋を渡るとふと潮の匂い。かつて鳴海潟と称していたせいか。濃尾平野南端の一隅、おびただしい人家が軒を連ね大工業地帯の周辺の居住地域と見受けられる。

ここが龍蟠山瑞泉寺(りゅうばんざんずいせんじ)小高い丘の上、山門の美しさにまず眼を奪われる。切妻屋根の中央部が上方に突き上がっている黄檗式重層朱塗四脚門、愛知県指定文化財になっているそうだが、実に見こたえがある。門には『曇華峰(どんげほう)』語感がなんともいえない。同じように重厚な屋根を持つ鐘楼は寛延元年(一七四八年)の建立というが、全体が墨色の濃淡を成し、すこぶる温かい。しっとりとした黒い屋根瓦が山門を中心に幾重にも連なり、奥に

向けて広がってゆく様はまさに一幅の絵を見ようだ。

九月の頭なればまだ暑く、太陽は天空にじつと止まり、あたりは静まり返っている。

山門を入るとどっしりとした法堂が現れ、左手に僧堂、右手に長さ十四間もあるという庫裏。それらがぐるりと繋がっている前庭に、敷き詰められた白砂の間を這うように季節の花が群れ咲いている。応永三年(一三九六年)に開山したこの寺は、曹洞宗大本山総持寺の直末(じきまつ)で檀家数八百を抱え、二十五の末寺を持つ名古屋きつての古刹。第三十五世住職が、旧制蕪山中学四十九回生の近藤高峰さん。

「蕪山時代は、伊豆の最勝院の小僧をしとってな」書院に通されて耳にした老師の優しいなまりとあたたかいお声にまずほっとする。旧制蕪山中学。授業中。階段をとことこと上がって来る小使いさんの足音がする。聞きつけた級友たちが領き合「電報だ」。先生までが「それ、近藤、葬式だ」。誰よりも先にその気配を感じていた鎬(たかし・



蕪(いらか)の波が美しい瑞泉寺

幼名。三年生の時から高峰)は自分の勘が違っていることを祈ったが、無情にも足音は教室の前でピタリと止まる。鎬が勉強道具をカバンに入れ始めると「近藤、電報だよ」教室に入ってくるなり小使いさんはまっすぐに鎬を見て言った。檀家の人が亡くなると葬式の仕度にかからなければならぬので早退するようにと師匠(最勝院住職)から学校に電報が来るのだ。「いいなあ、勉強サボれて」「あ、あ、俺も帰ってやあ」そんな声を背に鎬はよれよれの戦闘帽(この学年の制帽は戦闘帽

だった)を掴むと駿豆線に飛び乗り中大見(現中伊豆町)の最勝院へ急ぐのだった。

昭和二年十一月十五日、鎬は名古屋市昭和区川名本町で近藤家の六人兄弟の六男として出生。子供時代はやんちゃな少年だった。

「最勝院の住職の妹さんが隣家に嫁に来とって、寺で小僧が一人欲しい、欲しいと言っとってな」その頃、瑞泉寺の僧侶であった縁戚の浅井大仙師が最勝院の住職となつて、弟子を探していたのだ。昭和十二年、鎬少年が小学三年生(十歳)の時だった。

「汽車に乗せてやるというので大喜びで行った...それが縁だったね(だったね)...」老師は述べた。汽車に乗った。静岡で下車、二週間ほど滞在していたが、さて出発という時、師匠(浅井大仙師)は静岡駅で、里心ついた鎬に「名古屋はどつちだ」と聞いた。鎬はわからないままに東京の方を指差した。師匠は鎬を連れてそのまま汽車に乗り込んだ。三島で降りると見たこともない変な電車に乗って修善寺に着いた。

修善寺の仏具屋で師匠は三方を買って鎬に背負わせた。それからまたバスに揺られ、山里に降り立った。見ると山門の外で雲水が一人待っていた。三方を背負って歩いている鎬を見て「まるで三方が歩いているみたいだ」と雲水が笑っ

た。「その雲水が、毎晩童話を読んでくれてのお。歌を歌うてくれた」老師は目を細める。

両親や兄達と別れ一人お寺に入った幼気な(いたいけな)少年に毎晩童話を読んでくれた雲水がいた。金田一來さん(現東伊豆町東泉院住職)さんといい、今はもう八十歳になるというが、後年、老師の晋山式に招かれてどれほどお喜びだったことか。

「最勝院は修行道場だから裸足だね。小学校に通うのに裸足だった。中大見小学校の校長さんが『近藤は裸足で寒いに。官舎に行くと風呂場に靴下が干してあるから貰ってきなさい』というので喜んで跳んで行ったら、奥さんが『あらあら、靴下はこうやって履くのですよ』と、くるくると丸めて履かせてくれた」

「伊豆は暖かいところというが、天城山の北側は寒いだ。天城風(おろし)が吹き痛いくらい凍えた。最勝院の池が凍ってしまいい水を割って魚を助けたこともある」

修行は厳しかったが、小学校の校長先生も奥さんも温かかった。

昭和十五年、三月三十日のこと、炭焼きの不始末だったとかで山で火事が発生した。一ヶ月も雨が無かったためにあつという間に延焼。松かさが真つ赤っかになって飛んできた。たまたま、住職は鶴見の総持寺へ、雲水二人は下田に行っ

ており留守で、残った雲水と二人ではなすすべもなく、かやぶき屋根の寺はあつという間に焼け落ちた。

中学進学の前であったが一年延期せざるを得なかった。

「火事に遭い、雲水もいなくなつてしまったので中学は諦めてくれ。高等小学校を出てわしと二人でお寺をやってくれたら、そのうちお寺の一つも持たしてやるから」

師匠は鎬に言い含めた。だが、鎬はこの時ばかりは譲らなかつた。

「いいです。寺は、わし、いらんで（いらぬ）。これからの坊さんは中学も出んようじゃ駄目だから、せめて中学はいかないかん」

その時、居合わせた兄弟子が加勢してくれた。

「わしも中学は行かしてもろた。いくら火事に遭つても中学は出いて（行かして）やらないかんで」

すると師匠が言った。

「そうか。それじゃあ行くはいいけども一ぺんおいたら（落ちたら）二度と受けさせんぞ。野球部に入ったら即時退学させる。進級できななら即時退学」。

入学試験は口頭試問と運動場を走ることだった。口頭試問の最後に辻校長先生が「偉い坊さんになりなさいよ」と言ったので「こりやもう駄目だな」と諦めていたら、

合格していた。

昭和十六年四月入学。

「四年間修善寺駅まで自転車通つたが難儀だったね。古い自転車でもようパンクした。遅刻して入室許可証を貰いに行く」と『又パンクかね』と許可証を先に出してくれた。授業中よく居眠りをしたので職員室で座らされたね。忌々しかったので、普通に座るよりはと座禅をしていたら『こんなところでそんな座り方をして。馬鹿にとる』と、羽田先生にえらく怒られた」



温かいお人柄のにじみ出る近藤高峰老師

「学業と寺での修行の両立はさぞ大変だったと思うが、居眠りをする鎬の頭に教師のムチは容赦なく飛んだという。」

成績優秀だった高峰（鎬から改名）に、広田先生は旧制静岡高校進学を勧めた。躊躇する宗高峰に「中学は（学問の）まだ途中だか

ら大学まで行かなくてはいけない」と、河村先生が何度も諭した。結局、曹洞宗門立の駒澤大学に進学することになる。

太平洋戦争の年に入学し、学徒動員で国産電機の工場へ行き、昭和二十年卒業。高峰たち四十九回生の華中時代はずっと戦争中だった。

駒澤大学では昭和二十三年まで予科で学び、学生のまま本山（総持寺）で三年間修行した。

その頃、師匠は瑞泉寺の住職になっていた。寺に戻ろうとする高峰を惜しみ、本山の細川老師が「予科だけでは駄目だ。本科に進むように」と、師匠に手紙を書いてくれた。師匠は檀家に相談してから承諾した。高峰は再び大学へ戻り学問に没頭した。

卒業後名古屋へ。昭和二十八年、希望に燃える高峰は、大仙和尚から茶碗を一つ貰い、南区に新しい土地を求めて寺をつくりに行った。大泉寺を建立。幼稚園を併設し、軌道に乗って園舎を増築、これくらいという時に伊勢湾台風（昭和三十四年）に遭遇、全滅した。海が押し寄せてきて、魚が園舎の柱にへばりついていたりという。檀家衆も被災していたので助けてもらえなかつたが、持ち前の旺盛な行動力で再建し、檀家四百をかえるところまで築き上げた。

大仙和尚亡き後、後を継いだ住職も亡くなったために、檀家衆の評議で推挙されて瑞泉寺の住職を引き継ぐこととなった。

「平成五年の晋山式には、永平寺・総持寺は勿論、末寺からもたくさん住職が参列され、稚児行列も連なり、それはそれは華やかなものでした」と、名古屋市在住の同級生・岡田昭さんは語る。

「式の中で商量（禪の修行上で手本となるような祖師の言句・問答・逸話等を課題とした質問で難問が多い）も行われましたが、何人かの雲水の質問に対し、澁みなく即答される師の博学と動かさる信念には敬服したものです」。

「名古屋というところは葬式が派手でお」

「へえ、結婚式だけだと思つたら葬式も派手なんですか」

現在は、瑞泉寺住職として仕事に精を出す。

葬式が一ヶ月平均四〜五件、土曜日の法事が十何件、日曜日の法事は七件もあるということ。

足利義満公寄進の唐画を始めとする寺宝も数多く、愛知県指定の文化財あり、伽藍は十余棟、僧堂には三十六の単があり、全山三千坪、建坪四五五坪、畳の数三五五畳という大寺院の管理と維持は想像を超える。

伽藍の中を案内していただく。

「まあ、なんてきれい！」

お駕籠だ！ 殿様の乗るようなお駕籠がある。

赤い漆塗りで、周囲を金の箔で飾ってあるなんとも美しく豪華なお駕籠！

「これは、昔、お大名が使つたものですか？」

「いや、この間の晋山式の時にこれに乗ってね・・・」

「お駕籠に揺られてお披露目の行列をしたのですね！」

六十余年前、汽車に乗せてやるからと言い含められ、家族と別れて名古屋を後にした少年。当時十歳だった少年は、その時すでに自分の運命の何たるかを感知していたに違いない。それから試練は己の身体でがっちり受け止めて、逆に運命を甘受し、誠実に生き抜いた。

そして、この美しい塗物のお駕籠でふるさとに帰ってきたのだ。

「一人の力でやれないことは多いが、私には節目節目で助けてくれる人が多かった。先祖の力、歴代住職の力、冥加の力を感じます」と、その人は静かに語った。

冥加とは：知らず知らずのうちにお神仏の加護をこうむること。

目に見えぬ神仏の力。

訪問 小野登志子（文責）

相原・西井

龍城山下のなかまたち